

序

小学校5年生のとき、第二次世界大戦の戦況の悪化にともなって、学童疎開によって長野県の伊那谷に移り住んだ。秋になると冬に備えて山に薪を拾いに行くのが日課であった。幼かった子供にとって、一番気になったのが天候であった。当時は戦時中のこととて、天気予報なるものは新聞にもラジオにも報道されなかった。そこで、家を出るとき必ず炊飯係りのお爺さんのところに行って、「今日の天気大丈夫？」と聞いた。するとお爺さんは、山にかかった雲の動きを見て「夕方3時ごろから雨が降るから、それまでに帰っておいで」というように、その日の天気を教えてくれた。そのお爺さんの天気予報の正確さには子供心に驚嘆し、そのお爺さんを心から尊敬していた。そのお爺さんは、長年の経験から本能的に天気を予測する超能力を身につけていたのである。

今日では気象衛星から送られてくる雲の動きや気圧の変化によって、素人目にも天候の推移を容易に読み取ることができるようになった。それだけ人間が進化したと言えるだろうか。科学や技術の進歩によって、我々が利用しうる文明の利器は加速度的に増えてきている。それによって、我々は膨大な情報量を短時間で処理し、より広い空間を支配することができるようになった。しかしその反面、人間の持つ大切な原始的能力が失われつつあるのではないかと危惧される。

研究とは本来、物事の真理を探求する行為であり、未知のものを既知に導く行為である。何が真理か、何が未知かを探り当てる第一感人間の持つ直感力であって、決して論理的思考によるものではない。そうした直感力は、すべての人に生まれつき備わっている資質であると思う。研究者は自然の事象やさまざまな現象を鋭く直視し、そこから本能的に感じとる直感力を失わないよう心掛けたいものである。

1994年10月

清水建設(株)技術研究所長

工学博士 山 原 浩